1Aa-10

「豊かさ」についての考察

○栗畑亜紀子、今中正美、朝倉富子、本間小枝子、道本千衣子
（跡見学園女大短大）

目的：１９９６年の「貧困撲滅のための国際年」に際し、貧困は存在しない豊かな国と認識されている日本において、「豊かさ」を衣、食、住生活、特に食生活の面から検討する。

方法：1996年度家政科学生の「私が豊かさを実感するとき」という作文、学生及び父兄に対する「豊かさ」についてのアンケート、食物分野を専攻する１年生の１０月一カ月の食事調査を検討した。

結果：①学生及び父兄の中の女性の80％以上、男性の70％が現在の生活を「豊か、あるいはまあ豊か」と回答していた。また生活の豊かさを学生は「物がたくさんある」ことで感じ、父兄は「家族団らんや自分のために使える時間的ゆとり」で感じると回答していた。
②衣、食、住生活の面では食生活が最も「豊か、あるいはまあ豊か」と感じられており、約90％の回答があった。また食生活の豊かさは「おいしいものを食べられる」「欲しいものが食べられる」「簡単にいつでもどこでも食べられる」ということで感じていた。
③豊かと感じられている食生活の実態を知るために行った食事調査の結果は、平均食事回数2.7 回／日で、欠食率は朝食が23％で最も多かった。家庭で作られた食事（内食）をとっていた学生は朝食92.5％、昼食25.7％、夕食67.6％であった。外食をした場所はファミリーレストランが最も多く、食事を買った場所ではコンビニエンスストアが最も多かった。メニューの中にはカロリーメイトという回答が51あった。